人権のひろば

Vol.233

「人権のひろば」に対するご意見、ご感想は戦略企画室広報広聴グループまたは、人権室までお寄せください。

「あいさつ」から始まる 地域の多文化共生

増え続ける訪日外国人

最近、街で外国人とすれ違うことが当たり前になっていませんか。

観光局の統計によると、年々観光や就労などで訪日する外国人数は増加しています（図1）。加えて、今年9月のラグビーワールドカップや、来年の東京オリンピック・パラリンピック、2025年の大阪・関西万博などのイベントなどもあり、今後も訪日外国人の増加が見込まれています。

郷に入れば郷に従え？

このように外国人が増加し、身近なところで接する機会が増えたことにより、日常生活でトラブルに発展することもあるでしょう。例えば、地域のゴミ出しなどが挙げられます。しかし、そういったトラブルの多くは、言語の違いや一方的に日本の文化や常識などに当てはめて相手を見てしまうことで起こりがちです。

「郷に入れば郷に従え」ということわざがありますが、これは外国人に対し一方的に日本の文化などを押し付けてもよい、ということでしょうか。確かに、日本語や日本のルールを少なからず学んでもらう必要はあると思います。しかし、そのためにはまず私たちが相手の言語や文化などの背景を尊重することが大切なのではないでしょうか。相手の文化的背景を理解せずに押し付けては、相手も日本のことを学びたいとは思わず、結果として外国人が地域で孤立してしまうかもしれません。

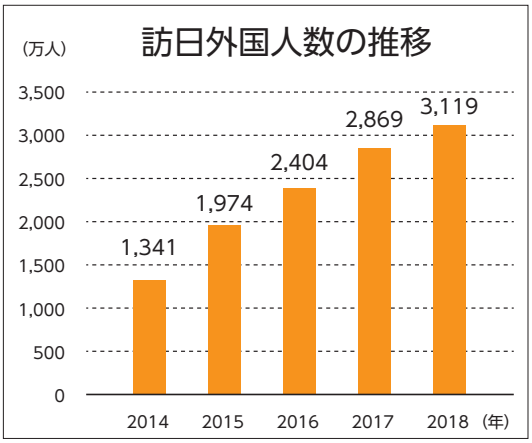
今、地域に求められる「多文化共生」

総務省では、「多様な文化等の背景を持つ人々が互いの文化的差異を認め合い、対等な立場を築こうとしながら、地域社会の構成員としてともに安心して生きていくことのできるような地域づくり」を行う「地域の多文化共生」の推進を掲げています。急速な国際化が進み外国人が地域社会の一員となっている今、どうすれば「地域の多文化共生」を実現していくことができるのでしょうか。

地域の多文化共生を実現するためには？

気軽に実践できるものとして、相手の国のあいさつを一つ覚えて、簡単なコミュニケーションをとる方法があります。相手を理解しようとする姿勢を見せることによって、日本語や日本の文化を学んでみようという気持ちが生まれるのではないでしょうか。このようにあいさつを入り口に少しずつ異文化への理解を進めていくことが、「地域の多文化共生」につながっていくはずです。

そうして交流ができた人と一緒にオリンピックなどを観戦してみるのも楽しいかもしれません。



（図1）